

令和5年度 第38回

こいずみ

# 小泉八雲をよむ

やんめ

感想文・詩入賞作品集



共催 松江市  
松江市教育委員会  
一般社団法人八雲会

©soh

文豪小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、松江での一年三ヶ月にわたる暮らしのなかで、当時失われつつあった古き良き日本の面影を見出し、美しい文章に載せて全世界に紹介しました。松江市では、「国際文化観光都市・松江」の礎を築いた小泉八雲の顕彰を目的とした様々な事業を行っています。

昭和六十一年から毎年行っている「小泉八雲をよむ」感想文・詩の募集事業も今年で三十八回目となりました。今回は、感想文二十九編、詩二十二編、合計五十一編の力作をお寄せいただきました。

作品集には、応募作品のうち優秀賞、優良賞及び佳作を受賞した九編の作品を掲載しています。多くの皆様がこの作品集をご覧いただき、小泉八雲を身近に感じる契機としていただきたいと考えています。

結びに、ご応募いただきました皆様をはじめ、この事業にご協力いただきました皆様方に感謝申し上げます。

令和六年三月

共催  
後援

松江市・松江市教育委員会・一般社団法人八雲会

新宿区・熊本市・焼津市・小泉八雲記念館・山陰中央新報社

朝日新聞松江総局・毎日新聞松江支局・読売新聞松江支局

産経新聞社・中国新聞社・新日本海新聞社・島根日日新聞社

共同通信社松江支局・時事通信社松江支局・NHK松江放送局

T S Kさんいん中央テレビ・B S S 山陰放送・日本海テレビ

エフエム山陰・山陰ケーブルビジョン

目 次

第38回 感想文 入賞者

★小学生の部

〈佳作〉

小泉八雲のこわい話を読んで

島根県松江市 高木 栞……………1

講評……………1

★高校生の部

〈優良賞〉

「十六桜」を読んで

京都府京都市 立山 双葉花……………2

〈優良賞〉

小泉八雲の越境する思い

東京都東久留米市 本田 舞乙……………3

講評……………5

★一般の部

〈優秀賞〉

小泉八雲 変遷する価値観への眼差し

『赤い婚礼』の二人の女性から

北海道釧路市 居川 三十……………5

〈優良賞〉

溶かされた鏡

福岡県北九州市 菊池 健……………7

〈佳作〉

私と勇子をわけけるもの

福島県会津若松市 西谷 桃葉……………9

講評……………10

第35回 詩 入賞者

〈優秀賞〉

おとぎの国へと

広島県広島市 柳坪 幸佳……………10

〈優良賞〉

K w a i d a n s o l s

東京都文京区 遠藤 玲奈……………12

〈佳作〉

茶碗の中の男へ

島根県大田市 山形 淑華……………12

講評……………13

# 感想文

## 小学生の部

### 〈佳作〉

#### 小泉八雲のこわい話を読んで

島根県松江市 高木 椋

わたしは、小泉八雲記ねん館に行ったことがあります。本物の小泉八雲がかいた本があつて、いろんなひょうしがあつて、きめこまかいがらやえでした。そのときに雪女をよみました、ほかにもよんでみたかったので「怪談 小泉八雲のこわい話」という本を読みました。

この本の中の、「耳なし芳一」と、「ろくろ首」を読みました。この二つにきょううう点があり、一つ目は、「いまから何百年もまえのことです。」というでだと、二つ目は、和尚さんがでてくることです。

とくに、和尚さんのことで心にのこつたことがあります。それは「耳なし芳一」の和尚さんには、じゅんときたことです。なぜかという、本当に芳一のことをしんぱいしているのがつたわつてきたからです。

それがわかる場面は、芳一の体じゅうにおきょうをかいてあげたけれど、耳にかくのをわすれていて、亡霊に耳をちぎられてしまったのが自分のせいだとみだを流してわびていたところ。でも芳一はその後きずをなおしてもらつて、だいすきながつきのびわをひきながら一生しあわせにくらしたそうです。きっと和尚さんもそんな芳一を見て、しあわせになつたと思います。

小泉八雲のお話は、ぞくぞくするこわさと、亡霊たちやたすかつた人々がさいごはしあわせになつた物語が多いようです。そこから小泉八雲は、やさしかつたのだらうな、と思ひました。だから記ねん館にあつた本のひょうしもしんさいなものだつたのだなと、思ひました。また次もこわいたのしさとハッピーエンドの話を読みたいです。

### 講評

小学生の部は残念ながら佳作作品だけの応募でした。三年生の作品ですが、小泉八雲の作品を二つ読んで共通なものを探している視点が面白いと感じました。このように、一つの作品に対して他の作品を重ねて読むことにより、それぞれの作品が明確に理解できるようになり、深く考えることができるようになっていきます。この小学生の作品も同じ作者である小泉八雲の作品を続けて読むことに味わいを感じています。「共通なものだけでなく、相違点は何なのか」と考えていくと小泉八雲の文学にさらに読み深

めることができるのではないのでしょうか？　このような視点で読むことを子どもたちに期待したいところですよ。

（講評者 濱岡 宏行）

## 高校生の部

### 〈優良賞〉

#### 「十六桜」を読んで

京都府京都市 立山 双葉花

一年に一度、人や場所に会えるとしたら、あなたは何に会いますか？　この本の主人公は亡くなってからも毎年一月十六日に決まって現れる場所があります。そこにはどんな想いが込められているのでしょうか。

この主人公は屋敷の庭で成長した一本の桜の木の下で幼少期を過ごしました。自身が老人となった頃、全ての子供たちより長く生きて、この世で愛するものはこの木しかありませんでした。しかし、ある年の夏、突然その木は枯れて死んでしまいます。主人公は木を想い悲嘆に暮れます。それから近所の人たちが主人公を想い桜の若木を見つけ庭へ植え、慰めようとなりました。けれど、長年愛してきた木が失われた慰めにはなりませんでした。

そこで主人公は自分の命を落としそれを木に移すという神々の計らいでその木を救うことにします。侍の作法に従い自らの腹を切りました。すると、祈念が木の中へ入り、同じ時刻にその木は花を咲かせました。それが、一月十六日でした。それから毎年一月十六日に桜の花を咲かせるようになるのです。

人生の中でもう一度会いたいと思うものは誰しも必ずあるはずで、亡くなった家族やペット、友達や恋人、もしくは人間でなくても廃棄された場所など人それぞれ心残りのあるものはあるはずです。この主人公は木に魂が移ったため周りから自分の姿に気づいてもらえないことはありません。それでも毎年花を咲かせます。それが主人公の生き甲斐なのか、この世に残した心残りなのかそれは誰にも分かりません。それでも主人公は自分の命と引き換えに木を救いました。主人公にとってこの木は自身の人生そのものだったのでは無いでしょうか。幼少期の頃から共に過ごした木が先に無くなるのは自分自身が受け入れられなかったのではないのでしょうか。だからこそ毎年桜の咲く春ではなく、自分が命を移した冬に花として姿を現しているのかもしれない。自分の生きていた世界にもその木に對しても心残りがあるから命を落とし木に移すことで木と一緒に生きていくように感じているのかもしれない。

もしも、自分の大切なものが亡くなった時、自分自身の人生と亡くなったものどちらか選ばなければならぬ境遇に立ってしまったらどちらにも心残りが生まれるはずですよ。この主人公のように一緒に生きていくことが出来るのならばどれだけ幸せなこと

しよう。世の夫婦などパートナーでもどちらかは先に亡くなりませぬ。「自分の命を犠牲にしてまで守りたいものがある」と言う言葉がありますが、実際自分の体を張って守ることは簡単にはできません。この主人公はそれができました。私は初め、この主人公を勇敢な人だと感じました。

誰かが亡くなった日はその人の命日となります。命日には仏壇の前で手を合わせる人が多くいると思います。実際目に見えて会える訳では無いけれど目をつぶり頭の中で、心が繋がっているように話しかけることはできます。主人公はその逆のことをしているのではないのでしょうか。主人公の命日である一月十六日に毎年自ら花を咲かせることでみんなに会うことができているのではないのでしょうか。まだ、自分自身の人生を終わりはなかつたはずです。たつた一本の木を守るために急遽自らの命を絶ち、木に魂を移したのです。主人公はどこか一人寂しいのではないのでしょうか。誰かに自分の存在に気づいて欲しくて毎年その日に花を咲かせるという形で姿を現しているのかもしれない。もしも私が主人公の立場なら自らの命を絶つことは出来ないと思います。大切なものが無くなったとしたら私はそのものの分までしっかり生きたいと思います。主人公は木だけが無くなることを許せなかつたのかもしれない。だから一緒になることを選んだのではないのでしょうか。

「十六桜」、それは主人公の命日でもあるけれど主人公の魂はまだ生きていてということを表している花なのかもしれません。花となつて一年に一度姿を現すことで生きていくことを表している

るのでしょうか。もし、自分の命を乗り移すという形で大切なものが守られるのならあなたは自らの命を犠牲にすることはできませんか？

## 〈優良賞〉

### 小泉八雲の越境する思い

東京都東久留米市 本田 舞 乙

世代を超越する魅力がそこにある。それが小泉八雲の描く世界観である。私は、今では珍しい大家族に生まれた。七人兄弟の六番目である。長男とは、二十才近く離れている。家では、常に兄と姉に囲まれて育つた。とは言え、勉強を教わつたわけでもなく、ましてや年が離れていることもあり、一緒に遊んだ記憶もわずかである。それでも印象深いのは、本を読んでもらつたことだつた。数ある本の中でも、とりわけ印象に残っているのが、日本の怪談であり、なかでも衝撃的だつたのが、「雪おんな」だつた。日本の怪談の象徴とも言える小泉八雲の世界は、いつの時代も語り継がれる日本人の面影なのかもしれない。

イギリス領ギリシャのある島でラファディオ・ハーンとしてこの世に生を受け、明治時代日本に渡り小泉八雲として活躍した作家と、「雪おんな」含む『怪談』が結びつくまで、私には多少の時間

を要した。おそらくは少なからぬ差別があったこの時代に、蒼い瞳の西洋人が、日本の自然風土に深く根差した寓話や幽霊話などに理解や興味を抱くはずがあるまい、と思っていたのだろう。小泉八雲は、まさにこの思い込みと文化の差異を打破した、稀有で偉大な人物といえる。

「雪おんな」は、窮地のときの約束と自分自身への甘えが重なり合うように思えてならない。雪山でどうにも困っている巴之吉を助けた女は、この秘密を公言しないという約束をして去った。のちに姿を変え、巴之吉の前に表れる。人の心は清く美しいと同時に、とくに儂いものもある。小泉八雲は、私にそう伝えるようだった。約束を守る。守り続ける。ということ、信頼が揺らいでは成立せず、ましてや妥協も許されない、心と心の共同体が織りなす世界なのだろう。約束という見えないものを交わし合うことは、心が美しくなければならぬ。人間の本能が試される雪山での出来事。そこで約束した思いを、儂くも散らせる巴之吉の浅はかな行動。約束という見えない相貌を守り続ける矜持がどれだけ困難なことか、人間に求められる固い絆であり、信念ではないだろうか。

私は、どれだけ美しい心を持ち続けていけるのか思い知らされた。人は常に美しさを求める。私が幼少期から続けているクラシックバレエだって、その一つだ。細微なしぐさ一つとっても、体の使い方から表現方法まで、多彩な動きをいかに美しく優美に魅せるかが重要である。それは見えるものだけでは収まらず、見えないところまでをも追求するのが、本当の美しさだ。私のバレエの先生は、

小泉八雲原作「雪女」に基づいて創作された「ゆきひめ」を海外で公演したバレエ団に所属している。多様な世界で共感される小泉八雲の世界は、月日が経とうと受け継がれる本当の心の美しさだと推測する。それこそが、憧れを辿る輪郭線である。

小泉八雲ことラフカディオ・ハーンは、両親の離婚後フランスやイギリスで多感な時期を転々とする中、十六歳の時イギリスの寄宿舎で遊びの最中ロープの結び目が左眼を強打し失明、以降の人生は右目も完全失明の恐怖に怯えながら過ごしたとされる。しかし八雲は常時眼鏡を用いず、時折片眼鏡もしくは望遠鏡を用いて見るに留め、瞬時に光景を瞬時に焼き付け、残像をなぞる手法で新聞記者としてまた作家として執筆したという。小泉八雲記念館には日常使用していた椅子と机があり、不自然な高さの組み合わせに机に顔をこすりつけんばかりに文字を書いていた様子と、左眼は映らない横顔の写真のみ残されている。高い美意識と自尊心、研ぎ澄まされた五感に裏打ちされた知性、想像力と表現力に感服である。帰化して五十歳代半ばで没するまでそう時間はなく、かねてより抱いていた興味と熱意を作品に昇華したモチベーションは、日本文化への敬意と共に自身への癒しも大きいと感じる。人の思いというものは、自分だけではなく相対する相手方まで考えなければならぬ。相手への思いやりと、いつまでたっても忘れてはならない美しい人間の心。小泉八雲は教えてくれたのだろう。

小泉八雲のことばに現代社会にも繋がる知恵があるとすれば、読み手にも、有象無象の自然の風向きを鋭敏に捉える五感の鍛錬が

求められよう。日本人として生きる姿勢を独自の視点で教示する、小泉八雲が唯一無二の作家たるゆえんである。私は、そんな八雲の美しさを希求していきたい。

## 講評

高校生の部は九点の応募があった。授業で取り組まれたと思われる応募が多かったことは、八雲作品との出会いを広げる意義深いものである。惜しむらくは、あらずじを長く書きすぎて、感想文としての醍醐味を感じる作品が少なかったことである。よって優秀賞に該当する作品はなかった。

優良賞の「『十六桜』を読んで」は、感想文の題材として選ばれることの少ない怪談話だという点にまず目を引かれた。主人公の選択について、自分に引き寄せて考えている素直な文章にも好感がもてた。「小泉八雲の越境する思い」は、八雲の人生や世界観にまで思いを馳せ、自分なりの解釈について、豊かな語彙を駆使して伝えようとする姿勢を評価した。（講師者 西村 勝美）

## 一般の部

### 〈優秀賞〉

#### 小泉八雲 変遷する価値観への眼差し

#### 『赤い婚礼』の二人の女性から

北海道釧路市 居 川 三 十

小泉八雲の作品に登場する女性には、深い愛情と強い意志を持った人物が多い。「帰ってきた死者」の妻は、自分の死を知り絶望した夫の前に現れて彼の命を助け、一緒に暮らし子を産み育てた。「水飴を買う女」は、墓の中で死の間際に生んだ赤ん坊のため、夜な夜な幽霊となって飴を買い与えるという、母の強い愛を感じさせる話だ。

一方、強すぎる愛情が怨念に変わって、他人に仇をなしてしまう場合もある。「破られた約束」の妻はその代表だろう。今際の際に交わした、決して後妻を娶らないという約束を夫に反故にされ、後妻を妬みその命を奪ってしまう。

このような愛情深い女性達の中で、「赤い婚礼」に登場するお玉は異色のキャラクターだ。「赤い婚礼」は、明治初期、およしと太郎という若い恋人達がいたが、およしの義母の姦計によって醜悪だが金満な岡崎という老人の下へおよしが嫁がされることになり、二人は心中を図るといいう物語だ。この義母がお玉である。彼女の性質

を具体的に見てみよう。

まず非常に計算高い。およしの容姿や性格から女としての市場価値を見極め、岡崎の資産等を調べ上げ、より多くの金銭を巻き上げようと画策する。

また合理的な現実主義者の面もある。太郎の存在を利用して岡崎に揺さぶりをかける一方、太郎にもおよしとの結婚に希望を持たせ、計画が終わるまで当て馬としての役割を持たせようとする。

そして性格が冷酷である。多くの金銭を得るといふ自身の欲望に基づいて行動しており、若い恋人達の切ない思いなどは気にかけていない。また母としてのおよしへの愛情も持ち合わせていない。

なぜ八雲はお玉をこのような特異な人物にしたのだろうか。私は「新しい価値観」の持ち主の代表として八雲がお玉を描いたのだと考える。維新後、身分制度改革によって誕生した価値観——財力のあるものが成功者であり、義理人情や道徳心などは前時代の遺物と嘲笑う、そんな価値観だ。実際お玉はあらゆる士族を心中で軽蔑していた。

一方のおよしも、ただ運命に翻弄されるだけのか弱い女性ではない。お玉が新しい価値観の持ち主ならば、およしは「古き士族階級の価値観」を持っていた。だからこそ、義母の企みに気づいた時、悪を許さない精神が鋼のような意志の強さを発揮し、運命に抗おうと自らを奮い立たせることになった。お玉とおよし、二人の女性を通して、八雲は新旧の価値観を対比させていると思われる。

二つの価値観の対立は、岡崎に嫁ぐことを承諾したと見せかけた

およしがお玉を出し抜き、恋人と一緒に汽車の前に身を投げ出すという凄惨な結末に終わる。一見これは、およしつまり古い価値観の敗北のように思われる。しかし、そうではないだろう。彼らは一緒に死ぬことで、来世で必ず結ばれると信じていた。だからこそ、およしは勝利を確信し、勇気を抱いて行動を起こしたのだろう。線路に身を投げ出し、汽車が迫りくる中、およしが太郎に向けて言った言葉が印象的だ。

「これからは二世も、三世も、私はあなたの妻、あなたは私の夫、太郎さま」

死を前にした二人の、青ざめつつも穏やかな笑顔が目には浮かんてくる。一方のお玉は大事な商品であるおよしを失った。岡崎との話も反故になったことだろう。本作は若い二人が命を散らした悲劇ではない。古い価値観が持つ強さと勇気が、新しい価値観が企てた計略を打ち破ることができた、救いの物語なのだと思ふ。

ところで八雲の態度で印象的なのは、彼が決して新しい価値観を悪だと決めつけていない点だ。それは、お玉を本作の悪役に据えつつも、彼女を悪人だとは決して言っていないことから分かる。

この八雲の態度はどこから来るのだろうか。留意したいのは、近代日本の価値観が変わった背景の一つに、西洋からの新しい文化や技術の導入があることだ。本作でも、およしと太郎の出会い、新しい学制によって設置された小学校だったし、二人の命を直接奪ったのは、西洋技術の象徴である汽車だった。その意味では、二人は最初から最後まで新しい価値観に翻弄されたとも言えるだろう。

日本で英語教師の職を得た八雲も、新しい価値観をもたらした側の一員だという自覚があったと思われる。だからこそ、古い価値観に味方して新しい価値観を正面切つて批判するような態度を取らなかったのではないか。もちろん、古き日本を愛していた八雲の心情が、どちらに寄っていたかは明白だ。しかし自分の立場を明確にせず、ただその眼差しを古い価値観に向けるに留めた。私には八雲のこの彼らしい態度がすごく好ましく感じられる。

八雲の優しくも憂いを帯びた眼差しは、本作だけでなく、他の多くの作品にも感じられる。この独特の感性が伝わってくるからこそ、彼の著作は今も私達を魅了して止まないのである。

## 〈優良賞〉

### 溶かされた鏡

福岡県北九州市 菊池 健

称名寺は福岡市東区馬出にある元応二年（一三二〇）創建の古刹である。元は博多区下川端にあったのだが、大正九年、道路拡張に伴う区画整理事業で現在地に移転して来た。小泉八雲がこの寺を訪れたのは明治時代も末の頃だった。その時の感慨を「博多にて」と言う小文に綴っている。

八雲が見たのは異様と云つていい光景だった。大仏の頭部だけが

境内に置かれ、その頸のあたりまでびっしりと、大量の銅鏡が積まれていたのである。頭は兵庫県で作られた試作品を入手したもので、銅鏡は信者の女性たちが寄進し、大仏の胴体を鑄造するための原料になるものだった。

これに強い違和感を覚えて、八雲は筆を進める。大仏建立計画はそれ自体が膨大な破壊ではないのか、と云うのだ。大量の鏡の一枚一枚はかつて、赤ん坊の、花嫁の、母親の笑顔を映していたはずで、「鏡は女の魂」との日本の言い伝えを糸口にしながら、八雲は昔話の「松山鏡」を引用する。

越後の国の松山と言うところに一人の若い侍が住んでいた。藩主に随行して江戸へ上り、勤めを終えて帰る際に、娘には菓子と人形を、妻へは銀メッキの銅鏡を土産とした。松山の地に初めて持ち込まれた鏡という物語の想定になっていて、鏡という物を知らない妻は、そこに映る顔を訝しく思ったが、夫は「それはお前の顔だよ」と教える。恥じた妻は鏡を仕舞い込んだままにした。

時が移り病を得て死期を悟った妻は、娘に「私に万が一のことがあったら、この鏡を覗いてご覧なさい。私に会えますから。悲しむことはないのよ」と言い置く。

母親の死後、娘は言いつけ通りに寂しくなると鏡を覗いては、そこに映る母親によく似た自分の顔を母と思った。そのことを娘から聞いた父親の描写が、この物語を締め括る。「それをいとあはれに思つて、父の眼は涙に曇つた」

「松山鏡」の引用を受けて、八雲の想像力は一気に時空を超える。

「現在は過去の投影で、未来は現在の反映であらねばならぬ」として、娘は鏡の中の己の姿を通じて母親の魂そのものを見、話しかけていたのだと受け取る。そして「我々の個々は真に宇宙の何かを映す鏡である」と断言するのだ。破壊の象徴のように思われた称名寺の溶かされるべき銅鏡は、ここで壮大な期待の象徴として、八雲に読み替えられる。「光は常に一である如くに、我々は一である」と熱っぽく説くのである。

文末になると八雲の思考は西洋と東洋の哲学の違いや、死生観にまで及び、すべての者の運命は、死によってある非常に甘美な、感情のない統一体へと作り変えられる、などと難解さを増して行き、少々私の手には余る。

称名寺に積まれてあった銅鏡は鑄直され、明治四十五年、高さ五・五メートルの釈迦如来坐像となり「博多大仏」の別名で信者や市民の尊崇を集める。負けず嫌いの九州人の気質を物語るように、「奈良、鎌倉に次ぐ三つ目の大仏」と博多っ子は言い張ったりしたりらしい。

しかし、現在の称名寺の境内に、博多大仏を見ることは叶わない。ただ、往時を偲ぶ石造りの台座だけが残されている。昭和十九年、戦時下で国家により強制された金属供出により姿を消したのである。破壊ではなく、鑄直されることによって、大仏と言う一体化される壮大な期待の象徴に変わった膨大な量の銅鏡。しかし、大仏が人々の信仰や祈りを集めたのは、創建からわずか三十年余に過ぎなかった。

供出された金属類は、鉱物資源の乏しい大日本帝国の武器の原料として再利用される。美しい女性の笑顔を映していた銅鏡が大仏になり、今度はそれが溶かされて得られた金属から、人を殺す銃弾や銃器が作られて行ったことになる。

称名寺の台座から大仏が消えて八十年になろうとするが、ロシアによるウクライナ侵攻など、この世から戦争は絶えない。宗教や信仰の面から見れば、戦いを止めさせようと呼びかける宗教指導者がいる一方で、理不尽なロシアの「特別作戦」を理解し、それを推し進めるプーチン大統領に祝福を与えるロシア正教の指導者もいるのである。

博多にて八雲が幻視した人々の一体化の夢は、難解な部分がありながら「人間一人一人が実は宇宙を象徴する鏡なのだ」として、光明を感じさせる美しさを持つと私には思える。今のこの世界の現状を、没して百二十年が経とうとする八雲ならどう見るのか、訊いてみたい衝動に駆られる。

## 〈佳作〉

### 私と勇子をわけけるもの

福島県会津若松市 西谷 桃葉

「天子様 御心配」

小泉八雲『勇子』はこの鋭い一文から始まる、大津事件を題材にした小説である。八雲は大津事件が起きた際、事件を償うため自害した少女・勇子に関心を持ち、彼女を主人公として『勇子』を執筆した。以下のような話だ。

ある日「天子様が畏れ多くも悲しんでおられる」という報せが国中をめぐり、街は自粛一色の様相となった。誰もが天子様の憂いを晴らしたいと願うなか、天涯孤独の少女・勇子もまた、自身に何か役立てることはないかと焦がれていた。勇子は思いを巡らせた末、ある結論を出す。それが「天子様のために自分の命を差し出す」というものであった。勇子は剃刀を研ぎ、金と遺書を用意し、白く清らかな服を着て、京都府庁の門前で首を切った――。

この作品において特に興味深いのは、勇子が自害を決意する自問自答のシーンである。勇子が天子様のためにできることを思案している時、どこからともなく声が降ってきて彼女に自害を勧める。前後の文章から、声の主は彼女の祖先や、もっとたくさんの日本人の先祖たちの意識なのだろうと察せられる。彼女ではなく、死者の意思が彼女を死へと向かわせるのである。勇子は歴史においても「烈

女」と称されるような女性だが、この小説における彼女は私が烈女と聞いて想像するような女性像とは大きく隔たっている。私は烈女とは、自分が死ぬ理由を自分で決める人間にこそふさわしい呼び名ではないかと思った。

このことから私が考えたのは、小泉八雲の時代の日本人に比べて私たちは途方もなく西洋化されているということだ。私が想像する烈女は、西洋で美德とされる自立した人格の人間なのだ。ところが八雲の目に映った日本人はそうではない。彼らにとつての美德は個々人の自立ではなく、日本という総体の隆盛にある。八雲は勇子のことを脈々と受け継がれる先祖たちの意思の宿る器に過ぎないと語るが、そこに主体性のなさをとがめるような響きはまるでない。先祖たちの意思に従って死ねる勇ましさが勇子の魂の見事な純真さの表れであるのだ。

しかし八雲の小説においても、すべての日本人がそのような崇高な一体感を持っているわけではない。勇子の高潔さが「サムライの娘にふさわしい」と称賛される一方で、この小説は次のような一文で結ばれる。

「にもかかわらず国家の高度な理由とやらで政府は知らぬふりを装っている」。

自死という壮絶な方法で訴えを知らしめた彼女を、黙殺する動きもまた八雲の目には映っていた。このような政府の動きは悪い意味で日本人らしい「出る杭を打つ、事なかれ主義」によるものだろう。私には正直、勇子のようなサムライの精神よりもこちらのほう

が身に覚えがある。勇子と違って私は事なかれ主義の性質と、自立を美德とする西洋的な価値観の二つでできている。そしてその理由は、「天子様」の不在によるものだというのが私の感想だ。勇子やこの作品に登場する大多数の国民が思いを寄せる「天子様」のよな宗教的思慕の矛先が、現代の日本には欠落している。批判ではなく、かつてはあったものが時を経てなくなったことによる、空席がある状態なのだ。そこに座ったのが西洋から来た個人主義の思想だ。

私は一読して勇子の迷いのない性格や死ぬというときにさえ動じない折り目正しさを好ましく思ったが、彼女と私の根っこがあまりに隔たっているのを、興味深いと同時に少しさみしく思った。

## 講評

本年度も、たくさんさんの素晴らしい感想文を読むことができました。審査の段階でずいぶん意見が分かれてきましたが、最終的には三つの文章を選出しました。

「赤い婚礼」を取り上げた優秀賞の感想文では、八雲の他の作品や八雲自身にも言及しながら、新旧の価値観の対立と、それに対する八雲の態度まで思いが巡らせられています。「博多にて」について書かれた優良賞の感想文は、文章内に占めるあらすじの量が多いものの、作品を現代社会の問題にからめながら読み解き、感想が分かりやすく書かれているところが評価されました。

佳作となった「勇子——一つの追憶——」の感想文では、ヒロイ

ン勇子と筆者の違いの源について一つの考えが示されています。これら三つの感想文以外にも素晴らしい点が多くありました。来年度の感想文も楽しみにしています。（講評者 三成 清香）

## 詩

### 〈優秀賞〉

#### おとぎの国へと

広島県広島市 柳 坪 幸 佳

そんな物語を

子どもたちに聞かせるなんてできないね、と

憤慨している

憤慨しながら、喫茶店の窓辺にすわって

ごくりと水を飲み込んでいる

のどをすべる水の冷たさ

そうすると

自分をはじめは納得なんかできなかった、と  
ページから人の姿が立ち上がる  
ヘルンさんが苦笑している

あたたかな店のなか

笑い声がかさなって揺れる

聞き取りにくい土地の言葉で

野球の試合に議論を続ける常連さんや

香ばしいコーヒーの淹れ方を聞かれ

企業秘密と笑うマスター

テレビでは

ワイドショーがずっと流れて

スーツの客がぼかんと口を開けて見ている

結局、あれと同じじゃないの

ワイドショーを指さして言う

ヘルンさんは困ったように笑っている

でもね、きつとその中にこそ真実がある

不用意な肝試しをして

子どもを死なせた若い女や

百両をもらいお札を剥がした使用人

そして、その中にもまた真実がある

赤ん坊のいのちのために

水飴を夜な夜なもとめた女の霊や  
抱き合って死んだおさない兄弟

そうだろうかとつぶやいて

ページを何度もめくっている

気がつくとき、時計が少し傾いている

いい一日でしたかね、と

マスターの声がお冷やとともに注がれる

そうですね、とわたしはこたえる

ごく当たり前の人びとの

物狂おしいほどの些末な日々

強くこころを奪われた時間

文庫本をかばんに戻すと

ヘルンさんはページにのまれて姿を隠す

常連さんが灯籠を下げて

よっこらせ、と立ち上がる

そうなのだ

誰もがまた

たましいに戻り出かけてゆくのだ

カップを洗うマスターの顔に灯りがともる

ヘルンさんの深い時刻が訪れるころ

こくん、と、夜が水のみこむ

やわらかく  
わたしたちは、おとぎの国にかさなってゆく

### 〈優良賞〉

K w a i d a n ソース

東京都文京区 遠藤玲奈

おいしい よりも  
こわい はなしが  
よみたいひとも

おりようりのほん  
よんでみて  
こわいの あるから  
さがしてごらん

ひよっとしたら  
おいしいのかもしれないけど  
ひよっとしたら  
きづかずに

たべてしまったことが  
あつたかもしれないけど

こわい こわい  
いちばんの  
K w a i d a n だ

ソースのあたりを  
さがしてごらん

### 〈佳作〉

茶碗の中の男へ

島根県大田市 山形淑華

壊れたカップや、散乱した茶カスを無言で、ぎゅっと口を結んで、たんたんと片づけました。そして、私の今朝書いた文章を見直したら、ほっとしました。今日過ごしていた平穏な日々があつたという時間が、書き残されている！と気づけました。ありがとうございます。割れた茶わん。砕けたカップ。やお湯呑み。心が割れているんだなって、気づけました。ぎざぎざ文様の鋭い白い割れた口が、目に焼きついています。苦しいです。散乱した茶カス。を、

黙々と、片づけました。悲しかったです。茶カスといっても、新しい、これから湯を注ぐうとしていたお茶の葉が、散らかされて、可哀相だなあ、まだ飲まれていないのにつて思つて。悲しくなりました。なぜ、私が片付けたのか。よく分かりません。みんな、人のせいにするから、片付けたくないのかもしれないと思ひました。片付ける気力がないのかも。散らかしたい放題、散らかして。散乱しているお茶の葉は、カラッと新しくして、キラキラして、おいしうだったのに。もつたないなあ。深く、深く、悲しくなりました。吐き気。ぐらぐら、めまいがしました。必死で、ノートにしがみついて、ボールペンを握りしめて。安定したかったけど。うちでは、幸せになれないのでしょうか。せつかく、半日、平穩に暮らせていたのに。いや、平穩な時間を感じて。それから、ノートに書いた時間で、心は癒やされたはずだから、それに感謝をしなればなりません。どうして、いつも、茶わんやカップ、お湯呑みは壊れてしまつていくのかな。心が壊れて、砕けてしまつた、心の傷を表しているのかもしれないと思ひました。拾う影を貝拾ひ。人の心は、あてにならない。自分の心が、幸せであるように、心がけたいと思ひました。人の心を、幸せにするなんて、やめよう。強制とかしたり、願つたりしたらよくない。放つておけば、いいんだ。と思ひました。割れん。割れん。私の心は、壊れないぞー。妖怪の顔が、現れたから。茶碗の中に妖怪の顔が、現れたから。心は、茶の中に溶けて、大丈夫。強くなつたんだ。茶碗の中の男が、嫌な事、全部、食べてくれたんだー。

によりによる。吐き気も、嫌になつちやつたことも、茶碗の中の男が、全部、引き受けてくれた。げえーと吐いた物事食べてくれた。ありがとう。

につこり笑つた茶碗の顔を描いてみた。立ち上る湯気に、すべてが忘れ去られていくような気がした。子供の頃、何でも、顔を描いていたっけ。太陽の顔、雲の顔、花の顔。きつと、子供心に、妖怪の存在に気づいていたのかもしれないな。くすつと、笑つてしまつたよ。

## 講評

応募作品数は昨年が続いて減少傾向にあり、広報のあり方にも工夫が必要と感じた。しかしながら、半数近くの作品が現代詩のフィールドで展開していて、それぞれの個性と感性の表現を読み取れた。賞の選考に当たっては、八雲作品をどれだけ読み込み受け止めているか、そして自分の言葉で新たな詩情をどこまで提示して見せたかどうかを基準とした。

優秀賞の「おとぎの国へ」とは、とある喫茶店で八雲作品を読みながら、リラックスして（へるんさん）との空想の遣り取りを楽しんでいるようですが、ゆつたりとした時間の流れの中で描かれている。八雲の作品世界を巧みに織り込みながら、世俗から離れたもう一つの国（おとぎの国）へ読者を誘う手腕は秀逸で、読み応えのある作品である。

優良賞の「K w a i d a n ソース」は、全行ひらがな書きで、料理の中に八雲の世界を見つけたユニークな作品。軽やかさが好感だが、少し踏み込みが足りないので、もう数連の展開が欲しいと思う。題を含め、着想の面白さに惹かれた。

佳作の「茶碗の中の男へ」は、〈茶碗〉や〈茶カス〉の居る小さな空間で巡る思惟について、行きつ戻りつしながらやや自嘲気味に喋り続けている。独特のリズム感に読みにくさを感じるが、それを通り越して身を寄せると存外な面白さに気付く。

（講評者 川辺 真）

【審査員】

稲田 忠徳  
川辺 真  
小林久美子  
佐々本浩材  
高嶋 敏展  
西村 勝美  
濱岡 宏行  
三成 清香  
（五十音順）

令和5年度

**「小泉八雲をよむ」  
感想文・詩 入賞作品集**

令和6年3月

編集・発行 松江市  
松江市教育委員会  
一般社団法人八雲会